

日本哲学プラクティス学会第3回大会プログラム

日時：2021年9月5日（日） 9:00～18:45

会場：オンライン（Zoom）

- 個人研究発表
会場1、会場2、会場3
- ワークショップ
会場1、会場2
- シンポジウム
会場1
- ネットワーキングタイム
会場1

事前申込：

大会の Zoom URL はお申し込みの完了時にお知らせします。参加費の支払いを含む申し込みには Peatix というサービスを利用します。下記 URL から行ってください。

<https://philopractice20210905.peatix.com/>

タイムスケジュール：

- 個人研究発表（午前の部） 9:00～12:30

会場1

- 1 9:00～9:40
久島玲「ことばの排除性への反省を織り込んだ哲学プラクティスの可能性：バフチンの対話理論における道化に注目して」
- 2 9:40～10:20
村瀬智之「哲学対話では何が起きているのか？—「配慮・尊重」と「問い」の関係を考える—」
- 3 10:30～11:10
馬場智一「哲学対話における問いとはなにか」
- 4 11:10～11:50
桂ノ口結衣「参加報告：第17回哲学プラクティス国際会議」
- 5 11:50～12:30
松川えり「私たちはどのようにして哲学の主体となるのか？：場とハビトゥスの綻び」

会場 2

- 1 9:00～9:40
上杉敬子「大学授業において「会話」をする ―大学授業における「哲学対話のルールに則った会話」の試み―」
- 2 9:40～10:20
金澤佑「弁証法的サイレントダイアログ（DSD）を用いた P4C の大学英語教育への応用の試み」
- 3 10:30～11:10
土屋陽介「「考える人を育てる教育」はどのようなものであってはならないか：知的徳の教育の観点から」
- 4 11:10～11:50
土井裕人「哲学研究発表会の学生・生徒による実践と、高大連携およびオンラインへの展開」

会場 3

- 1 9:00～9:40
小比賀美香子、松川えり「医療者にとっての哲学対話の意義とは～参加者の声から考える医療者のための哲学カフェ～」
- 2 9:40～10:20
松島恒熙「コロナ禍における哲学プラクティス～その手法と対話の生起について～」
- 3 10:30～11:10
小川仁志「メディアにおける哲学プラクティスの実践例及びその課題について」
- 4 11:10～11:50
三井規裕、稲原美苗「哲学対話におけるファシリテーターの役割の検討 ―ビジネス分野との比較を通じて―」

- 昼休み 12:30～13:30
- ワークショップ（午後の部） 13:30～15:00

会場 1

13:30～15:00
ワークショップ「医療現場の「話し合い」と哲学プラクティス」（代表者：堀江剛）

会場 2

13:30～15:00
ワークショップ「高専教育における哲学プラクティスの可能性 ～なぜ文理の境界は存在しないのか～」（代表者：松島恒熙）

- シンポジウム

会場 1

15:15～17:45

哲学プラクティス連絡会・哲学プラクティス学会共同企画
「哲学プラクティスの倫理」

登壇者：山本和則、小川泰治、小西真理子

司会　　：高橋綾

- ネットワークキングタイム

18:00～18:45

ブレイクアウトルームを活用した参加者間の交流の時間です。

予稿集

会場 1 (シンポジウム)

登壇者：
山本和則 (カフェフィロ)
小川泰治 (宇部工業高等専門学校)
小西真理子 (大阪大学文学研究科・臨床哲学)
司会：
高橋綾 (大阪大学 CO デザインセンター)

タイトル：哲学プラクティス連絡会・哲学プラクティス学会共同企画
「哲学プラクティスの倫理」

発表内容、要旨

さまざまところで哲学対話を行う実践が広がってきており、哲学対話が導入される領域やその目的、進行の仕方は実践する人によって異なりますが、哲学対話が、多くの人が参加し、自分について語り、交流する活動であるかぎり、対話の中やその前後で、対人関係のトラブルや発言による傷つきなどが起こる可能性があり、実際にそうしたことが問題になっているケースも存在します。また、教育現場や企業組織等、社会のいろいろな場所で哲学対話を行っていくにあたって、それが行われる場や組織の文化や仕組みとの齟齬をきたす場合もあります。

また、社会の様々な場所で哲学対話を行っていくことは、対話や効果の質保証、アフターフォローや介入の知恵、導入される組織との協働の仕方、謝金のもらい方等、研究とは異なる実践者としての倫理や責任、知恵の蓄積が求められることでもあります。海外では、こうしたノウハウを持つプラクティショナーと、研究者とは一部重なりはしますが、一線が引かれています。日本では、哲学対話や哲学プラクティスを紹介した人々の多くが大学の哲学研究者であったことや、大学の哲学・哲学研究者のアウトリーチ活動と見做されることもあるため、哲学対話を実社会に導入し根付かせるための実践的な配慮や倫理、知恵の構築はなおざりになっているところがあるように見受けられます。このような実情は、実践者や現場の視野からは顕著である場合でも、研究者側の視野からは見えづらくなっている場合もあるのではないのでしょうか。

このシンポジウムの目的は、社会のなかで哲学対話を行っていく上での倫理や責任について考えることではありますが、哲学プラクティスの倫理についての統制的なルールを策定することではありません。一般市民向けの哲学カフェ、教育現場での哲学対話、研究者が現場や実践に関わるときといったテーマで、現在はそれぞれが苦慮しながら対応している問題を共有し、対応する知恵（対応のしかたは、目的に合わせて多様でありえます）について交換すること、また、それを通じて、哲学対話を社会に根付かせるために、哲学プラクティショナーが果たすべき責任や倫理の問題について意見を交換したいと思います。また、哲学研究者の実践や現場への関わりについても、実践者・現場の人の様々な事情について丁寧に共有し、協働するしかたについて考えます。

会場 1 (個人発表 / ワークショップ)

久島玲 (東京大学大学院教育学研究科)
タイトル：ことばの排除性への反省を織り込んだ哲学プラクティスの可能性：バフチンの対話理論における道化に注目して
キーワード：対話 議論 包摂／排除
<p>発表内容、要旨</p> <p>言葉は他者との共通理解を図るうえで不可欠だが、誰にとっても平等というわけではない。とくにハーバーマスの公共性を前提とした論証主義的な語りは、能力や動機づけといった点で参加可能な対象を限定しており、排除の性質を帯びていると指摘されてきた。</p> <p>哲学対話もこうした批判を受けてきたが、一方で論証主義的な討議と比較するとこの排除の問題を改善に導く可能性も備えている。たとえば丸橋 (2010) が、「討議的なロゴス、ないしは理性的な話し合い」も「その外部たる〈他者〉との応答」によって成り立つという前提に立ち返ることで、「ロゴスの外部——〈他者〉——の余地」を認め保障する必要があると指摘しつつ、「近年注目されている哲学対話のようなロゴス的ともパトス的とも言えるような話し合い」の重要性も見えてくると示唆しているとおりである。</p> <p>本発表では、バフチンの対話理論における「道化」という存在の機能に着目して、こうした排除の問題を克服しうる対話実践の可能性を考察する。道化とは、権威の通用しない存在であり、非公式性をもって生真面目な権威を破壊する存在であると略述できる。そしてこの破壊は、否定的な意味にとどまらず再生的な意味も持つという両義性に注意する。すなわち、道化的他者は、公式な世界に反発して「格下げ・下落」的な語りを発することで、「社会と伝統が定めた接続の通路を切断し攪乱」するのであるが (中山 2019)、これは、議論・語りの場から排除されてきた非公式な存在を「言葉の多様性」のもとにすくい上げることと評価できる (遠藤 2021)。</p> <p>また本発表では、以上のような道化の機能という分析視座から哲学プラクティスを再評価する。お茶の水女子大学附属小学校における「てつがく」の授業における哲学対話や、米国の大学ディベートにおいて黒人や女性といった被抑圧の歴史を持つ方々によって展開されたクリティーク (Kritik) と呼ばれる哲学思想的な議論といった事例を分析を見ることで、排除されてきた語りを包摂する対話空間の構想のための一助とする。</p> <p>遠藤秀将 (2021) 「『ガルガンチュワとパンタグリユエル』における対話——「グロテスク・リアリズム」に基づいたラブレの教育思想」東京大学大学院 修士学位論文 丸橋静香 (2019) 「理性的な話し合いと〈他者〉——『教えること』の重要性——」『近代教育フォーラム』Vol. 28, pp. 67-72. 中山真彦 (2019) 『ラブレとセルバンテス 近代小説の原点』水声社</p>

村瀬智之（東京工業高等専門学校）

タイトル：哲学対話では何が起きているのか？－「配慮・尊重」と「問い」の関係を考える－

キーワード：哲学対話、配慮、尊重、問い

発表内容、要旨

哲学対話（P4C）ではお互いへのケア的思考・態度、相互理解や安全性（セーフティ）が重視されるために、その実践は学級・学校の共同体形成に資する、という見解は、特に日本においては標準的なものである。一方で、哲学対話は、まさにその名の通り「哲学」的対話、哲学的探求の一形態であって、必ずしも相互理解や安全性、ケア的思考はその実践において本質的でないという見方もある。

本発表では、まず、この二つの主張について、その内実を検討する。具体的には、哲学対話の国内での語られ方やケアに関する議論を参照し、哲学対話においては参加者同士の配慮・尊重、相互理解が生起しているし生起するべきである、という点を確認する。また、他の対話や探求との比較を通して、哲学対話においては「問い」が重視されているし重視されるべきである、という点も確認する。すなわち、次の二点を確認する。

1. 哲学対話では、参加者自身（参加者の個性）が相互に配慮・尊重される。
2. 哲学対話では、「問い」を重視する（問いを中心とする）探求や吟味が行われる。

その上で、上記二点を関連づける、次の仮説を提示する。

〔仮説〕 問いを重視する（問いを中心とする）探求や吟味は、参加者自身（参加者の個性）が相互に配慮・尊重されることに資する。

また、以下の前提をとることは、上記の仮説の成立に寄与するように思われる。

〔前提〕 問いは、その人の個性を表している。

本発表では上記の〔前提〕を提示するとともに、仮にそれが受け入れられた際にどのような帰結をもつかを検討する。たとえば、〔前提〕を認めることは、哲学対話が問いを介して、そこに参加している人の個性を配慮・尊重する対話であるという帰結をもつように思われる。換言すれば、問いを中心とする哲学対話の「探求」は、この〔前提〕を介して、ケアやセーフティと概念的な関係をもっている、という帰結をもつ。これらが正しいとすれば、場合によっては両立不可能であるように思われていた1と2の主張が〔前提〕を介して次のような概念的関係をもつことになる。すなわち、「2と〔前提〕から1が帰結する」という関係である。

以上の議論を通して哲学対話の多層的な意義について参加者の皆さんと検討してみたい。

<p>馬場智一（長野県立大学）</p>
<p>タイトル：「哲学対話における問いとはなにか」</p>
<p>キーワード：問い、当事者性、モヤモヤ、感覚</p>
<p>発表内容、要旨</p> <p>発表者は、一般向けの哲学カフェおよび中学、高校、大学で哲学対話を実践している。対話の際は、テーマだけ決まっていて、テーマに関連する問い出しをすることが多い。初めての参加者に対話の進め方を説明する際、気をつけているのが、「問い」という言葉である。</p> <p>「問い」という言葉は、哲学に馴染みのない参加者にとってやや漠然とした言葉である。問いだしというものを初めてする人にしばしば見られるのが、テーマ（不運について）と問い（不運とはなにか）の混同である。したがって、「問い」はかならず「疑問文」で表現してくださいと、発表者は説明することになっている。</p> <p>とはいえ、疑問文で表現したとしても「問い」は、目の前の誰かに差し向ける「質問」（しあわせだと思う時はいつですか？）とは異なるし、解決すべき「問題」（どうすればしあわせになれるのか？）というわけでもなく、苦悩や怒りの表現としての「疑問」（なぜ私はこんなに不運なのか！）でもない。いや、これらのどれにも重なりつつ、そのどれとも同一ではないのが問いである。</p> <p>発表者は高校の探求の授業の外部講師を務めてもいるが、探求の出発点となるのもやはり問いである。しかし、哲学ではないので、解決すべき現実的な「問題」（どうやったら町のゴミを減らせるか）も探求活動の出発点に十分ふさわしいものとなる。しかしそれでも、問題や疑問に切実さがなく、紋切り型である場合、その探求に生徒が苦しむことになる。哲学対話でも似たようなことがある。問いはあるものの、そこで問われていることを、問う人が本当に不思議だと思っていない場合、対話は空転し深まらない。</p> <p>とはいえ、発表者は、出発点となる問いが必ずしも哲学的な問いでなくともよいと考えている。それよりはむしろ、問いがどんな形であれ、問う人自身から出てきたということが重要であると考えている。本発表では、発表者自身の実践の経験を例に挙げながら、なぜ哲学対話において、問いの「哲学らしさ」よりも問いの当事者性が重要なのかを考えてみたい。</p>

発表者：桂ノ口結衣（大阪大学）
タイトル：参加報告：第 17 回哲学プラクティス国際会議
キーワード：連帯、協働、データベース、スペイン語圏、philosophy with vulnerable people at social risk
<p>発表内容、要旨</p> <p>7月末に開催された今年の第17回哲学プラクティス国際会議（オンライン、開催国ロシア）に参加した。哲学プラクティショナーが国際的に協働する大きな潮流ができつつあると感じた。今回の発表では、特にその潮流を感じた具体的な3つのプロジェクトやその雰囲気や日本の動向と比較などしつつ紹介し、今後の日本の哲学プラクティショナーおよび研究者たちの活動の参考になればと願う。もし時間に余裕があれば、発表者が個人的に興味をもった発表やWSの感想等も共有したい。</p> <p>①データベース作成プロジェクト</p> <p>スペイン語圏の哲学プラクティショナーたちを中心に、全世界の哲学プラクティスに関する広範なデータベース書籍がつけられている。書籍自体はまもなく刊行されるが、情報や、プロジェクトに協力する大学等研究機関は引き続き募集される。</p> <p>②哲学プラクティショナー向けオンラインハブポータルサイトおよびそれを起点とする複数のプロジェクト</p> <p>哲学プラクティショナー同士のハブとなることを目指し、ポータルサイト作成が世界の有志プラクティショナーたちにより進められている。またそのサイトを起点として、交流や共同研究プロジェクトが進められようとしている。</p> <p>③アカデミア変革プロジェクトとしての執筆</p> <p>いくつかのジャーナルで論文が募集されているが、その時必ず、業績主義の中で生き延びねばならない PhD への思いや、アカデミア内部に哲学プラクティスに関する言説が積み重ねられていくことの解放的意味など、どのようなジャーナルがどのようにつくられてきたか、そしてなぜそこに参入してほしいかが丁寧に共有されていた。また、アカデミア向けの哲学プラクティス概説・入門書プロジェクトへの寄稿も受け付けられている。</p> <p>こうした哲学プラクティショナー同士が連帯していく動きは、今回の会でもいっそう温められていた。たとえば新参者でも知っているような名だたるベテランプラクティショナーたちのインクルーシブでクリエイティブな雰囲気や、参加する人たちの豊かな多様性と互いへのリスペクトがこうした動きを支えている。身近なつながりは大切だが、せまい業界での権力関係や人間関係の固定化はときにプラクティスを阻害する。日本についても、東アジア、アジア・太平洋圏、世界とのつながりの中に参入していくことで、もっと自由に、多様なプラクティスや研究が開いていくだろう。</p>

発表者：松川えり（無所属）
タイトル：私たちはどのようにして哲学の主体となるのか？：場とハビトゥスの結び
キーワード：場、ハビトゥス、主体、臨床哲学
<p>要旨</p> <p>発表者は、様々な現場で哲学プラクティスを通して、現場の問題について現場の人とともに考える臨床哲学を実践しようとしてきた。学校で生徒や教員と、病院で患者や医療者・医学生と、福祉施設で利用者や支援者と、育児サークルで子育て中のお母さんたちと……。こうした現場での対話は、街中のカフェのような「サード・プレイス」と呼ばれる場所で行われる対話より一層、当たり前を問い直すことや対等に話し合うことが難しい。</p> <p>ピエール・ブルデューによれば、それぞれの場（champ/界）にはそれぞれの場に固有のハビトゥス（habitus/慣習）が存在し、私たちの行動はそのハビトゥスに明白に意識されることなく方向づけられている。たとえば、育児サークルでは自己紹介時に必ず子どもの人数と年齢が言及されること、学校や病院で教員や医師が違いを「先生」と呼び合うことなどがこれに当たるだろう。場の成員は、ハビトゥスによって「自明の経験」を共有するだけでなく、それぞれがもつ特性に応じて序列的に位置づけられ、それぞれの位置にふさわしい振る舞いを判断しながら場とハビトゥスを再生産する。</p> <p>このような特性をもつ場で、私たちはどのようにして対等に話し合い当たり前を問い直す哲学の主体となることができるのだろうか？</p> <p>場のハビトゥスを共有しない進行役の存在や問いかけが有効にはたらく場合もあるが、必ずしも上手くいくとは限らない。発表者は学生の頃、育児サークルの哲学カフェで進行役として問いを投げかけても、未婚で子どものいない者の経験不足からくる疑問とみなされ、流されてしまうことが多かった。反対に「先生」と呼ばれる立場の進行役が、自身の発言の影響からやりにくさを感じることもあるだろう。</p> <p>今回の発表では、進行役も決して中立的な立場ではない場のなかで、同じ社会的位置を占める人たちのあいだにある微細な差異から、ハビトゥスの結びと哲学の主体となる契機を見出しうることを実践例から示し、哲学の主体になるとはどういうことか考察したい。</p> <p>【参考文献】 Bourdieu, P. 1980, <i>Le sens pratique</i>. Minuit. Bourdieu, P. 2000, <i>Propos sur le champ politique</i>, Presses universitaires de Lyon.</p>

代表者：堀江剛（大阪大学）
タイトル：ワークショップ 医療現場の「話し合い」と哲学プラクティス
キーワード：医療、医療現場、話し合い、齟齬（ディスコミュニケーション）
<p>今日の医療では、治療方針の説明や決定に際して、医療者（医師・看護師・ソーシャルワーカーなど）と患者・家族との話し合いがますます重視されつつあります。ところが実際の医療現場において、多くの場合これを十分な仕方で実現しているとは言い難く、様々な齟齬（ディスコミュニケーション）やモヤモヤを残したまま「説明した／されたことになっている」「話し合ったことになっている」のが現状です。これは、医療を提供する医療者・提供される患者や家族の双方にとって、是非とも（解決・解消とまでは言わないにしても、少なくとも）解きほぐしたい医療の課題と言えるでしょう。</p> <p>ここには、高度に発達した医療の専門化システムや病院組織の問題が背景にあると考えられます。そうした背景を踏まえた上で、関係する人々が納得のいく「話し合い」の場を作る工夫が求められます。哲学プラクティスが「対話する（＝話し合う）力」を模索し試みる活動だとすれば、この医療現場における課題や工夫に対して何かヒントを提示できるのではないのでしょうか。</p> <p>ワークショップでは、医療・福祉施設の関係者と意思決定支援を可能にする施設づくりを検討する立場から、服部俊子さん（大阪市立大学）にお話ししていただきます。その上で、少人数による哲学対話（ソクラテック・ダイアログ）の進行役を務めてきた堀江がコメントを加え、最後は「医療現場における話し合いの困難と工夫」についてディスカッションを行いたいと考えています。</p>

会場 2 (個人発表 / ワークショップ)

発表者：上杉 敬子 (一橋大学大学院社会学研究科 特別研究員)
タイトル：大学授業において「会話」をする ―大学授業における「哲学対話のルールに則った会話」の試み―
キーワード：会話、哲学対話、準備的活動、アクティブ・ラーニング
発表内容、要旨 本発表は大学授業において対話的实践を成立させるための「準備的活動」に焦点を当てるものである。ここで言う対話的实践については近年の教育改革の議論において重要な役割を担ったアクティブ・ラーニング (active learning) を念頭に置いており、本発表では、アクティブ・ラーニング (以下、AL と略記) 型の授業において学生たちが対話を成立させることが困難な状況にある場合には、対話の前段階にあたる準備的活動としての「会話」を行う機会を学生に提供する必要があることについて述べる。 「大学授業において『会話』をする」という提案には問題があるように思われるかもしれない。実際、現在の大学教育に求められているのは、小・中・高の教育現場で実践される「主体的・対話的で深い学び」(「改訂学習指導要領」(平成 29・30 年告示))の教育を受けた学生に相応しい内容の教育を行うことである。「学習指導要領解説」(平成 30 年)において「アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善」と説明されている一方向性の授業から双方向性の授業への転換については大学教育の課題として先行して検討されており、改訂学習指導要領が告示される以前から多くの大学で AL が実践されていた。 発表者もまた勤務校の方針に従って AL を行ったのだが、このとき学生たちに「いきなり」対話をするよう要求したために授業の不成立状況を招いてしまった。その後「哲学対話」を知り、その実践方法を参考に哲学対話の一般的なルールに則って「会話」をしたところ、寡黙な学生の発話や周囲の学生の傾聴の姿勢が見られた。 本発表ではこの個人的な経験をもとに、双方向性授業の成立が困難な状況にあるクラスにおいては、学生主導の AL 型授業(対話をする授業)を実践する前に準備的活動としての「会話」を行う機会を頻回に提供すべきことを論じる。

発表者：金澤 佑（関西学院大学）
タイトル：弁証法的サイレントダイアログ（DSD）を用いたP4Cの大学英語教育への応用の試み
キーワード：サイレントダイアログ、弁証法、P4C、大学英語教育、P4ELT
<p>発表内容、要旨</p> <p>C. S. パースの可謬主義が示す通り、自己見識への偏執ほど知的成長を阻害するものは無い（Peirce, c. 1908/1931）。また、一方の考えが正しく他方が間違っていると説得する（白黒つける）ことで心を勝ち取るのではなく、真摯な相互的思索によってのみ分離を超越することができる（Gardner, 2009, p. 206）。固執や権威といった旧来型の信念の確立法に頼ってでは対応できないVUCAの時代にあつて、創造力・批判的思考・メタ認知といった21世紀型スキルの重要性はますます高まっている。これらを教育の場で育成する様々な取り組みが開発・研究されている中、批判的・創造的・ケア的思考力の醸成をモデル化したP4Cは（Lipman, 2003）、分野を超えて参照すべき先見のかつプラグマティックな知見を数多く提供している。</p> <p>清水（2020）はP4Cの大学教育への応用可能性を指摘し、有効な手法の一つとしてサイレントダイアログ（以下SD; 永井・齋藤, 2020）を提示している。村瀬（2015）によると、SDは一枚のワークシートを回覧し学生が次々と意見を書いていくことを骨格とし、シートは（a）問いを書く箇所、（b）意見を書く箇所、（c）反論を書く箇所、（d）共通の前提や根本的対立点を析出する箇所、（e）感想を書く箇所、の5要素で構成される。特筆すべき点としてb, c, dの記入者が異なることが挙げられ、この工夫により書き言葉による哲学対話を通じた協同的思考力が涵養されることが期待される。</p> <p>本論では、P4Cの英語教育への応用（P4ELT）の試みとして行った、弁証法的サイレントダイアログ（DSD）を用いた大学英語授業実践について報告する。「弁証法的」の文言は、上記SDの（d）の過程において、対立する意見の比較・対称を超越し、両者を統合・止揚した高次の解決策の創出をするよう高等教育向けにアレンジしたことを反映している。関西の私立大学の学部一回生を対象としたall-in-Englishの語学授業の場で、概ね村瀬（2015）に則った方法でDSD活動を実施した。事後アンケートの結果、75名の学生が「またやってみたい」と回答し、「どちらでもよい（7名）」、「もうやりたくない（0名）」を大きく上回った。四技能の観点ではライティング力（65.9%）、21世紀型スキルの観点では批判的思考能力（67.1%）の伸長に効果があるとの実感が最も多く報告された。発表では、参加者からの量的・質的データの双方に加え、応用言語学における情動（金澤, 2020）や情動関与処理仮説（Kanazawa, 2021）との関連からの理論的示唆についても議論される。</p> <p><<参考文献>></p> <ul style="list-style-type: none"> -Gardner, S. T. (2009). <i>Thinking your way to freedom</i>. Temple University Press. -金澤佑（編）（2020）『フォーミュラと外国語学習・教育』くろしお出版 -Kanazawa, Y. (2021). Do not (Just) Think, But (Also) Feel!: Empirical Corroboration of Emotion-Involved Processing Hypothesis on Foreign Language Lexical Retention. <i>SAGE Open</i>, 11 (3), 1-13. https://doi.org/10.1177/21582440211032153 -Lipman, M. (2003). <i>Thinking in education</i> (2nd ed.). Cambridge University Press. -村瀬智之（2015）「紙上対話という授業実践の試み」『高等教育』38, 368-373. -永井玲衣・齋藤元紀（2020）「対話の目的と方法：いろいろなかたち」河野哲也（編）『ゼロからはじめる哲学対話』（pp. 102-112）ひつじ書房 -Peirce, C. S. (1931). Preface. In C. Hartshorne & P. Weiss (Eds.), <i>Collected papers of Charles Sanders Peirce</i> (Vols. 1-2; Paras. 1.1-1.14). Harvard University Press.

(Original draft written c.1908)

-清水将吾 (2020) 「対話の目的と方法：教育する—大学教育」 河野哲也 (編) 『ゼロからはじめる哲学対話』 (pp. 60-66) ひつじ書房

発表者：土屋 陽介（開智国際大学）
タイトル：「考える人を育てる教育」はどのようなものであってはならないか：知的徳の教育の観点から
キーワード：知的徳、徳認識論、生涯学習、批判的思考、教育における主体性
<p>発表内容、要旨</p> <p>本発表では、分析哲学系の認識論研究の中で生まれた「徳認識論（virtue epistemology）」の知見を踏まえて、初等中等教育の中で「知的徳（intellectual virtues）」の教育を推進しようとする哲学者ジェイソン・ベアと、それに対して慎重な立場を取る教育哲学者ハーヴィ・シーゲルの教育論をそれぞれ検討する。</p> <p>ベアは、知的徳の教育を理論面・実践面の双方から最も熱心に推進している代表的人物の一人である。本業は現代哲学の研究者であるが、2013年にアメリカ合衆国カリフォルニア州に開校された「知的徳アカデミー」というチャータースクールの創設メンバーとして、学校開設および運営に携わっていることでも知られている。ベアによれば、学校教育の中で知的徳教育に取り組むことは、子どもたちを不安定で不確実な現代社会を生き抜くための「生涯学習者」に育てる上で大いに役に立つ。ベアにとって、理想的な思考者が備えているべき知的な人格特性（性格）である知的徳は、現代という時代において成功を収め幸福な人生を送るために必要不可欠な資質・能力なのである。</p> <p>これに対してシーゲルは、ベアの以上のような知的徳教育推進論に対して慎重な立場を取る。批判的思考力教育の研究に長年取り組んできたシーゲルからすれば、個人が自ら選び取って身につけるべき人格的価値を社会や時代の要請に基づいて学校の中で教育することは、知的に有徳な理想的思考者が備えているべき「批判精神」を最も深いところで毀損することになるからである。シーゲルの考えでは、自律的で独立した批判的思考者は、批判的思考力の教育には意義があるという価値観自体も、批判的に吟味し査定することができなければならない。</p> <p>本発表では、以上のシーゲルの主張を、教育における主体性に関するガート・ビースタの考察と接続させる。ビースタは、有名な「ロボット掃除機」の喩えを用いて、社会や時代への適応を目的とした思考力の教育は、その「適応の是非」自体を問い直したり批判的に思考したりすることができないため、本当の意味での主体的・自律的な思考者の教育になりえないと論じている。本発表は、これらの一連の議論を検討することを通して、「考える人を育てる教育」はどのようなものであってはならないかについて、一定の見通しを得ることを目的とする。</p>

発表者：土井 裕人（筑波大学）
タイトル：哲学研究発表会の学生・生徒による実践と、高大連携およびオンラインへの展開
キーワード：自主研究発表会、高大連携、知の飛び火
<p>発表内容、要旨</p> <p>哲学の探究を教室における単なる知識の習得でなく対話的实践として行うにあたって、学生や生徒の自発的な問題意識を引き出し、一方的な教示ではない相互の対話へと伸長させていくことが容易でないことは言うまでもない。昨今は対話を重視した取組も広まりつつある一方で、成績評価とそのため学修を前提とした授業の範囲を越えて学生が自ら「哲学する」ように促すことは、やはり容易ではないと思われる。発表者の勤務校である筑波大学では、対話を重視する哲学の授業が複数行われるなかで、（歴史学など専門を哲学としない者も含めて）学生が広く哲学について自ら探究して発表会を行い相互に共有する取組が2018年から展開されるようになった。これに触発され、筑波大学では学生の自主研究発表会が文系理系を問わず様々な学問領域で立ち上がり、いわゆる内発的動機づけに基づいた精力的な学問探究が学生の間で活発化している。</p> <p>プラトンの研究を本来のテーマとするとともに、科学コミュニケーションも実践領域に持つ発表者は、まさに共同での探究により「知の飛び火」（『第7書簡』341D）が起こってそれが次の探究を育てて発展する場を作るべく、こうした学生の自主研究発表会の活動を継続して支援しながら、その知見から様々な人が哲学を実践する方法論を確立するための試行を行ってきた。その中では、高大連携や中高生向けアウトリーチ事業によって中学校や高等学校の教育とも接続することや、新型コロナウイルス感染症の蔓延にも対応してオンラインで哲学の対話的探究を効果的に行うことが、重要な課題として浮かび上がってきている。本発表では、学生や生徒が自ら哲学を探究し対話によって共有する場を構成・発展させる方法論について、単にテレビ会議システムにとどまらないオンラインツールの活用も含めて検討した上で、古代ギリシア哲学にも立ち返って対話的プロセスによる哲学の実践がいかにあるべきか考察していきたい。</p>

松島 恒熙 (神戸高専 人文社会科)
タイトル：ワークショップ 高専教育における哲学プラクティスの可能性 ～なぜ文理の境界は存在しないのか～
キーワード：高専教育、応用倫理、対話、T・T、文理融合
<p>発表内容、要旨</p> <p>高専教育における哲学プラクティスはいかに可能であろうか？特に「理系」科目が圧倒的に多い高専において哲学の存在意義とは何か？そもそも「文系・理系」の区別は必要なのだろうか？本ワークショップでは、神戸高専の人文社会科・電子工学科・都市工学科・数学科の教員が、それぞれの専門を活かしながら哲学的授業を展開している様子を報告する。</p> <p>人文社会科の松島は、神戸高専のディプロマ・ポリシーやカリキュラムから哲学プラクティスの必要性を感じ、各学科の教員と協力しながらチーム・ティーチング (T・T) を実施している。当日はその詳細を提示し、各学科の発表についてトークセッションやフロアとの議論を行う。</p> <p>電子工学科の高田は、Human Computer Interaction(HCI)を専門とし、技術者やユーザとコンピュータの関係性のあり方を探ってきた。また、これらの取り組みから、プログラミング教育における倫理的観点の必要性を感じていた。そこで松島と連携し、(1)「AIを搭載するアンドロイドに人権はあるのか？」、(2)「匿名性と責任」を主題として哲学対話のT・Tを試みた。その結果を報告するとともに、情報工学における倫理教育の意義を考察したい。</p> <p>都市工学科の今井は、地域防災や環境保全を軸とし、国土管理やまちづくりのあり方を探ってきた。また、これらの取り組みから、土木工学教育における学際的観点の必要性を痛感していた。このようなことから松島と連携し、(1)「環境保全と災害リスクの関係性」、(2)「防災と地域のあり方」を主題として哲学対話のT・Tを試みた。その結果、学生は土木工学における学際的思考の重要性を認識し始めている。</p> <p>数学科の鯉江は、専門の代数やアクティブラーニング型授業について研究を行っており、高専では学年や学科を問わず幅広く指導してきた。今回は松島と実施した2件のT・Tについて報告する。(1)神の存在をめぐる「パスカルの賭け」を題材とし、「期待値への懐疑的な考え」と「式中の無限の注意点」について数学的な解説を行い、その後「信じること」について対話を実施した。(2)哲学者による様々な「人間の定義」を題材とし、数学における「必要条件、十分条件」や「反例」の考えを用いて人間の定義を再考し対話を実施した。</p> <p>以上の報告・提題をもとに、当日はフロア参加者と共に今後の高専教育における哲学プラクティスの可能性や課題について議論していきたい。なお、口頭での議論の他に、チャット機能も活用予定である。</p>

会場 3 (個人発表)

小比賀美香子 (岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 総合内科学分野)、松川えり (哲学プラクティショナー)
タイトル: 医療者にとっての哲学対話の意義とは ~参加者の声から考える医療者のための哲学カフェ~
キーワード: 医療者、哲学カフェ、教育、参加者、フォーカス・グループ
<p>発表内容、要旨</p> <p>岡山大学では、2018年から学生を含む医療者を対象に、自主講座として哲学カフェを定期的で開催している(2020年5月以降はオンライン開催)。その目的は、職種や立場のちがいを超えた対話を通して、患者の考えを理解する力とチーム医療や地域医療のための対話力を涵養することにあるが、実際のところ、参加者はどのように感じ、臨床現場にどのような影響を与えうるのだろうか?</p> <p>本研究発表では、この哲学カフェの参加者を対象に実施したフォーカス・グループの結果から、医療者にとっての哲学対話の意義について考察する。</p> <p>フォーカス・グループでは、同種の経験者数名を集め、インタビューと同時に観察を行う。今回のフォーカス・グループには、第8回「効果があるといえるのはどんなとき?」(2020年8月)、第9回「公私は分けたほうがよい?」(2020年11月)、第10回「“いのち”ってなに?」(2021年2月)の哲学カフェの参加者から、それぞれ5名(医師3名、薬剤師2名)、4名(医師1名、薬剤師1名、管理栄養士1名、医学生1名)、3名(医師2名、医療事務1名)が参加。テーマについて対話して感じたこと、哲学カフェが自分にどのような影響を与えたか、臨床現場にどのように影響したかなどを質問し、SCAT (Steps for Coding and Theorization) による解析を行った。</p> <p>その結果、テーマについて対話することによって、(1)言葉の多義性や多様な認識・価値観に触れ、自己の思考の相対化・明確化と他者の思考への理解が促されること、(2)対話のなかで出会った言葉や考え方が、医療現場で患者への説明や接し方に活かされていることが示唆された。また、テーマに関わらず(3)医療者自身が話を聴いて受容してもらう経験をするをとおして、患者の話を聴くことの重要性についてより深い認識や(4)臨床現場での思考の習慣化が促されること、さらに学びの場として(5)興味のないテーマほど講義より対話による学びが有効と感じられていることなどが明らかになった。</p> <p>このような特徴や影響をもつ対話は、各医療職がそれぞれの思考・価値観を優先しがちな医療現場で、医療者が患者や他職種の思考・価値観を尊重しながら協働することに繋がり、問題解決が困難な場面であっても正解ではない答えを探究する姿勢を育むと考えられる。</p>

松島 恒熙 (神戸高専 人文社会科)
タイトル：コロナ禍における哲学プラクティス ～その手法と対話の生起について～
キーワード：with コロナ、actor、spectator、対話の生起
<p>発表内容、要旨</p> <p>コロナ禍において、われわれの哲学プラクティスはいかに展開され、その手法はいかに変容してきたであろうか？そしてその際、対話の深まりはいかに担保されるであろうか？</p> <p>本発表は、コロナ禍における哲学プラクティスの在り方について、発表者の実践とアーレント思想の両観点から考察する試みである。</p> <p>われわれの日常を大きく変えてしまったパンデミックは、いうまでもなくこれまでの哲学プラクティスの在り方をも激変させた。というのも、参加者全員が車座になって密となり対話するという哲学プラクティスのオーソドックスなスタイルは、コロナ禍においてはNGとなっているからである。3密を避けることがwith コロナの新しい生活スタイルであるならば、われわれは新たな哲学プラクティスの在り方を探さなければならない。</p> <p>発表者が勤務している高専では、これまで感染状況に応じてオンライン授業と対面授業の両方を使い分けてきた。オンライン授業は、コロナ禍における授業の象徴とも言えるが、周知の通りその困難さは社会的にも問題となっている。普段の対面授業でさえ一方的な講義形式になりがちであるのに、オンライン授業ではさらに学習者が黙って話を聞かされるという状況が助長されるからである。このような環境において哲学対話を試みるならば、オンラインツールの諸機能を活用することが考えられる。今回は、グループワーク機能やチャット機能を活用した際の方法論を報告し、その長所と課題について考察したい。</p> <p>また、発表者は対面授業においても感染対策を講じながら哲学対話を試みている。具体的には飛沫を減らすためにサイレントダイアログを取り入れたたり、密を避けるために屋外にて「哲学実習」を実施している。</p> <p>上記のような実践において発表者が重視しているのは、アーレントの活動論における「行為者 actor」、「観客 spectator」という概念である。これらの概念をもとに、対話へと「参加する」とはいかなることなのか再検討し、他のプラクティショナーにおける「対話のルール」と照らし合わせて考察していく。以上のことを踏まえて当日はフロアと共にコロナ禍における哲学プラクティスの在り方について議論したい。</p>

小川 仁志 (山口大学国際総合科学部)
タイトル：メディアにおける哲学プラクティスの実践例及びその課題について
キーワード：テレビ、YouTube、Twitter、TikTok、雑誌
<p>発表内容、要旨</p> <p>テレビをはじめとしたメディアにおいて哲学を実践するとはどういうことか、その体験を踏まえて概要と課題について検証する。昨今哲学は一般の生活にも広がりを見せており、様々なメディアで触れる機会が増えている。</p> <p>私自身、ここ数年NHKのEテレで「世界の哲学者に人生相談」という番組の指南役を務め、テレビにおける哲学を実践してきた。また、それにとどまらず各種メディアにおいて哲学の実践をしている。</p> <p>たとえば、既存のメディアである紙媒体の本や雑誌等にとどまらず、インターネット上のメディアであるYouTubeやTwitter、またTikTokなどを使って哲学のコンテンツを実験的に配信している。</p> <p>そうしたメディアにおける哲学プラクティスの実践は、まだまだ日本では例が少ないが、今後増えていくことが予想される。そこで、主にNHKでの3年間の番組制作及び出演の経験を題材にしつつ、その意義と課題についてアカデミズムの観点から検証を行いたいと思う。</p> <p>具体的には、テレビで哲学を伝えることの難しさ、また出演者として語ることの功罪、さらには影響力という観点から考察を加えていく。</p> <p>同時に、私の場合従来型のものや他のメディアを含め様々な哲学プラクティスを並行して実践しているので、それらとの比較も行っていきたいと思う。日本では欧米のポップフィロソファー、つまりメディア哲学者やタレント哲学者のような存在は少なく、またさほど影響力もない。この機会にそのこと自体の問題点についても掘り下げていきたい。</p>

三井規裕（関西学院大学）、稲原美苗（神戸大学）
タイトル：哲学対話におけるファシリテーターの役割の検討 -ビジネス分野との比較を通じて-
キーワード：哲学対話、ファシリテーション、ファシリテーターの役割、対象、ビジネス
<p>発表内容、要旨</p> <p>ファシリテーションはビジネス、チームビルディング、まちづくり、医療サービス等の現場で活用されている。これらの現場でのファシリテーションは目的を共有し、参加者やチームメンバーが同じ方向に向かい成果を上げるため活用されることが多い。こうした現場において、ファシリテーションを実践する者は「ファシリテーター」と呼ばれる（堀 2004）。ファシリテーターは様々な技術が必要とされる。具体的には、場づくりの技術・言語／非言語コミュニケーションの技術・議論を構造化する技術・合意形成の技術などが挙げられる。こうした技術を用いることで組織やチームの成果を上げ、組織のマネジメント力を高めることができると捉えられている。「成果を上げる」という点から考えるとファシリテーションの方法に関する知見や実践は一定程度蓄積されつつある。しかしながら、哲学対話におけるファシリテーションにとって、これらの知見や実践は必ずしも必要ではない。また、哲学対話では目的を共有して成果を上げるという直接的な効果は目指していない場合が多い。むしろ、ビジネス分野におけるファシリテーションの知見（中村 2017；谷 2014）を前提にしてしまうと哲学対話の場を変質させてしまう可能性がある。</p> <p>ファシリテーションを実践してきた三井と哲学対話を大学の授業等で取り入れてきた稲原がコンビを組み教育実践としてのファシリテーションについて深く考え始めた。</p> <p>本発表では、哲学対話におけるファシリテーションの特徴について比較調査することを目的とする。まず、特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会で行われているファシリテーションを中心に文献調査を行い、整理する。次に、哲学対話におけるファシリテーションについて同様の調査を行い、ビジネス分野ファシリテーションとの比較・検討を行う。本調査から哲学対話におけるファシリテーションの特徴を明らかにし、哲学対話がもたらす自己変容（中岡 2012）について考えたい。</p> <p>参考文献</p> <p>堀公俊 2004 「ファシリテーション入門」日本経済新聞出版</p> <p>中村誠司 2017 「対人援助職のためのファシリテーション入門: チームの作り方・会議の進め方・合意形成のしかた」中央法規出版</p> <p>谷益美 2014 「リーダーのための！ファシリテーションスキル」すばる舎</p> <p>中岡成文 2012 「試練と成熟-自己変容の哲学」大阪大学出版会</p>